

第7章 救 済

前章では、罪に対する罰としての鳥への変身の物語を取り上げたが、同じように人間として生きることを奪われても、それを救いとみなすことができる場合がある。本章ではそうした物語を取り上げる。

1 スキュツラとニーソス

スキユツラというと、イタリア半島の爪先つまさきに潜み、シキリアとの海峡を通りかかる船に襲いかかる怪物がまず思い浮かぶが、これに劣らずメガラ王ニーソスの娘であったスキユツラの物語もよく知られている。その大筋をヒュギーヌスは次のように伝えている。

ニーソスは、マルス神の息子か、あるいは人によつてはデーイーオーンの息子とも言うが、メガラメガラの王であった。緋色の頭髮をしていたと言われ、下された神託によれば、この頭髮を守っているかぎり王権を維持できるとされていた。彼をユツピテルの息子であるミーノース王が攻略しに来た

とき、王をニーススの娘スキュツラがウエヌスに刺激されて恋し、彼を勝たせるために、父が眠っているあいだに運命の髪の毛を切った。かくしてニーススはミーノースに敗れた。だが、ミーノースがクレータに戻ろうとしたとき、スキュツラは約束にもとづいて自分を連れ帰ってくれ、と頼んだが、ミーノースが、どこよりも神聖な鳥クレータへこんな大罪人は受け入れられない、と言ったため、海中へ飛び込んでニーススの追跡を避けようとした。だが、ニーススは娘を追いかけるあいだにハリアーエトスつまり海鷲に姿を変え、娘のスキュツラはキーリスと呼ばれる魚になった。いまでも、その鳥はこの魚が泳いでいるのを見つけると、水中に身を投じるや爪でさらい、八つ裂きにする。

〔神話伝説集〕一九八

ここには、サムソンとデリラの物語を連想させるような運命の髪の毛のモチーフ、あるいは、敵将に恋した娘が祖国を裏切るといふ物語パターンなど、民話的な彩りが濃いことが見て取れる。それほか、ヒュギーヌスの話形では「救い」の要素がはっきりと現れず、またスキュツラは魚に変身したとされているが、オウイデイウスは、去りゆくミーノースの艦隊を追いかけるスキュツラを描いて、物語の結末を次のように語っている。

彼女は波間に飛び込み、船団に追いつく。焦がれる思いが力を生み、クノツソスの船にしがみつくと、望まれぬ道連れとなった。これを父親が見たとき——彼は、いまや空を舞う身、つい先ほど金色の翼をもつ海鷲となっていたので——、近づいて、しがみついている彼女を鉤先かぎさきの嘴で切り裂こうとする。彼女は恐ろしさから船尾を手から放した。すると、風が落ちてゆく体を軽やかに支え、海面に触れさせなかったように見えた。羽根が生えていた。羽根をもつ鳥に姿を変えたあとの呼び

名はキーリスで、髪の毛を刈ったことからこの名前がついた。(『変身物語』八・一四二―一五二)

スキユツラが変身したあとの名前はヒュギーヌスと同じくキーリスだが、ここでは魚ではなく、鳥とされている。オウイディウスが語っている語源は、ギリシア語で髪の毛などを「刈り落とす」という意味の動詞ケイローに結びつけるものだが、根拠はない。そもそも、この名前の魚はベラの種類らしいとされ、鳥のほうは鷹に似ているとも言いが、同定することが困難である。それはともかく、オウイディウスによれば、スキユツラは、父親の化身である海鷲の攻撃を逃れて船から落ちながら、海に没する寸前で拾い上げられるようにして鳥に変身しており、その点で、彼女が救済されて物語が終わったような印象を受ける。しかし、魚になった場合は、海面上がらぬかぎり海鷲に襲われずにすむかもしれないが、空を飛んでははつねに標的とされる危険がついてまわる。そもそも、どのようにしてニーススが海鷲に変身したのかという次第も、オウイディウスの簡略化した叙述ではよく分からないが、そのあたりのことを、その名も『キーリス』という小叙事詩が、多少とも筋のおおる形で、それが話としてよくできているかどうかは別として、語っている。

『キーリス』では、スキユツラは乳母の説得に従う形で、まずニーススにミーノースとの講和を勧め、ニーススが運命の頭髮に寄せる自信のためにこの画策に失敗したあとで、髪の毛を刈り落とす。これによってメガラが陥落すると、スキユツラはミーノースの船から吊り下げられて海面を引きずられてゆくことになる。彼女は天上の星を見上げて祈り、ミーノースに訴えかけた。

ミーノースよ、あめるときは私のことを神聖な契りを結んだ妻だとあなたは言ってくれました。この言葉を聞いてはいなくても聞こえていますね。私は縛られたまま渡ってゆくのですか、こんなに

も渦巻く波間を。縛られて吊り下げられたままでしょうか、幾日も幾日もこのままずっと。私も、ほかにふさわしい処罰の仕方があるなどと言える身分ではありません。私はこうして祖国と大切なわが家を敵の手に、それとは知らず、非情な暴君の手に渡してしまつたのですから。でも、ミーンズよ、私は考えていました、こんな罪深い仕打ちを受けるとすれば、私たちの結んだ契りがなにかのめぐり合わせで露見したときであろう、都の城壁を壊され、私の残酷な手で神殿に火をかけられた人々によつてであろう、と。でも、あなたが勝利を収めれば、仮に星が軌道を変えることがあつても、あなたが私を捕らえてこんな目に遭わせようとは思つてもみませんでした。いまや罪悪がすべてを打ち負かしたのです。

〔キーリス〕四一四—四二七

しかし、このような嘆きもいつしか言葉にならぬほど、彼女は消耗する。長い航海が続くあいだに彼女の頭はがっくりと垂れ、白い腕にロープの痣が刻まれたとき、ついに海の女神アンピトリテーが彼女に憐れみを垂れたという。

そのように美しい姿が波に翻弄されることに耐えられず、乙女の憐れむべき体を変身させたのは群青の王国を治めるネプトウーヌスの后であつたが、娘を永遠に鱗で被い、柔肌の身を不実な魚たちの仲間に入れようとは——アンピトリテーに従う群れは貪欲にすぎるため——考えなかつた。それよりも、空を舞う翼で宙に支え、地上での行為にちなんでキーリスに変えた。レーダーの白鳥よりも美しいキーリスであつた。

（同四八二—四八八）

スキュッラの化身キーリスには父ニーススと同じように頭頂に緋色の冠毛がある一方、胴体には大理石

のような白地にさまざまな彩りが混じり、脚は朱色でやせ細り、鋭い爪をもっていたとされ、救われて空へ舞い上がったのちは、決して人目に触れぬところで過ごしたという。それでも、このような暮らしすら罰を免れず、あのような娘が地上を飛び回ることにユツピテル神が憤激した。

父親はすでに没して暗闇の下に隠れていたが、その敬虔さゆえに——というのには、いくたびも艶やかな牡牛の血を祭壇に振り撒いて嘆願し、いくたびも神々の御座所を溢れる供物で飾っていたので——姿を変えてあこがれの命を戻してやった。神は彼がこの世で海鷲になるように計らった。ひらめく翼の鷲がつねにかの神を喜ばすからであろう。

(同五二四—五二九)

こうして、ユツピテルに救われて鳥に変じたのち、ニーススはつねにスキユツラを追いかけ続けている。『キーリス』の結びの四行はウエルギリウス『農耕詩』の詩行をそのまま用いているので、結末はそちらからの引用によることにする。

澄み渡る空に現れるは、高く舞うニーススと緋色の髪ゆえの罰を受けるスキユツラ。スキユツラが空を軽やかに翼で割きつつどこへ逃げようとも、見よ、敵意すさまじく、風切る音も高く追いかけるはニースス。ニーススが空高く迫れば、スキユツラは空を軽やかに翼で割きつつ逃げる。

(『農耕詩』一・四〇四—四〇九)

オウイディウスではスキユツラにとって救済であるかに見えたキーリスへの変身が、ここでは「罰」と言われる一方、海鷲に変身して救われたはずのニーススも、スキユツラをいつまでも追いかけているように、その点では、報いは果たされず、心の痛みは消えていない。それでも、キーリスと海鷲の前

身を知らずに両者が軽やかに飛び、風を切るさまを目にした人は、晴れた空と同じように心を癒されるようなすがすがしさを感じたかもしれない。ただし、それも、決して人の目に触れずに暮らすキーリスが姿を現した場合の話ではあるが。

2 ペリパース

スキュトラの場合には人の道に背く罪があつたが、罪はなくとも苦しみを味わう人間は多い。ペリパースの場合には、あまりに立派な王であつたため、それがかえつて仇となつた。そこで、彼に救済がもたらされたのは当然であつたように思われるが、この次第はアントーニーヌス・リーペラーリスによつて伝えられている。

ペリパースは、アッテイカにいにしえより住む民の一人で、大地の女神の子ケクロプスよりも以前の人間であつた。この者はいにしえの人々の王となり、正義と富と敬虔さを備えていた。アポッロンの祭儀を数多く執り行い、数多くの裁きを下し、彼を非難する人間は一人もなかつた。しかし、誰もが賛同して彼が首長に選ばれると、彼の業績を顕彰するために、人々はゼウスへの崇敬をやめて、ペリパースを崇めることとした。彼の神殿と社を建て、救い主にして恵み深き見守り手たるゼウスと呼んだのである。これに怒つたゼウスは彼の家をことごとく雷電で打ち壊すことを望んだが、アポッロロンが彼を殺して完全に滅ぼさぬように、彼は自分を大いに崇めてくれたから、と頼んだため、ゼウスはアポッロロンの願いを聞き入れ、ペリパースの家に赴くと、妻と一緒のところを見つけるや、両手で彼を押さえつけ驚き変えた。妻も夫と離れてはいられないので、ペリパー

スに連れ添う鳥として海鷲に変えた。かくしてペリパースにこの世での敬虔さに対する誉れを授けた。というのは、彼を鳥たちの王となし、聖なる王笏を守り、自分の玉座に就くことを許したのでから。ペリパースの妻には、海鷲に変えたことで、人々がどのような敬虔な行いをなした際にも、姿を現すことを許した。

〔変身物語集〕六

この物語を踏まえて、オウイデイウスは、

パッラスの城塞「アクロポリス」は、誰よりも公正なペーネーよ、おまえと、老ペリパースよ、おまえが並んで飛ぶのを見た。

〔変身物語〕七・三九九―四〇〇

という詩句を残している。それほど公正な王ならば、そもそも罰を受けるような行いを臣民に許すはずもないように思われるが、結局、それによって妻とともにアテーナイの空を永遠に統べることになったのは、救いというより、それにはるかにまさる誉れと言うべきであろう。

3 アニオス王の娘たち

救済と言えば、トロイア陥落後、英雄アエネーアースは、父アンキーセースを背負い、息子アスカニウスの手を引き、トロイア王家の守り神とともに、敵の槍^{やり}袋^{ぶくろ}と燃えさかる炎のあいだを救い出した。脱出した一行は、ウエルギリウスによると、イーダ山を越えた南の海岸から出港したのち、まず北へ向かってトラキーアに立ち寄り、次いで南進してデーロス島に上陸した。ここで落ち武者たちを温かく迎えたのがアニオス王で、彼はアンキーセースと昔からの友人であった。この王については次のような話

が伝えられている。

デーロスの王でアポッロンの神官であったアニオス王は、三人の娘の父となったとき、身の安泰をただ一柱の神の助けに頼らぬよう、娘らを父神リーベル「バックス」に捧げた。すると、神は彼に感謝して返礼し、娘の一人が手に触れたものはすべて穀物に、もう一人の触れたものは葡萄酒に、三人目が触れたものはオリーブ油に変わるようにしてくれた。ところが、このことをギリシア軍の総大将であるアガメムノーンが聞きつけた。千隻もの艦隊でトロイア攻略に向かっているところであったので、兵を送って娘らを連れ去り、ギリシア軍の兵糧を確保しようとしたのである。娘らは捕縛されると、リーベル神に呼びかけて嘆願した。すると、神は彼女らを鳩に変えて捕縛から脱出させた。このため、いまでもデーロス島では鳩に乱暴することは法度である。

(セルウィウス古注ウエルギリウス「アエネーイス」三・八〇)

この話をオウイディウスは、アニオス王自身がアンキーセースらを前にして語るといふ設定にしている〔変身物語〕一三・六四〇―六七四が、細部に若干の相違があり、それによると、アニオスには子供が五人（兄一人に妹四人）おり、アガメムノーンに狙われたとき、娘のうち二人はエウポイア地方の島へ向かったが、二人はそのとき兄のいたアンドロス島へ逃げた。すると、アンドロスへギリシア軍が押し寄せ、それに恐れをなした兄は妹たちを引き渡してしまったという。そのあとはセルウィウスの記すところと同じく、捕らわれた娘らはバックス神の助けにより雪のように白い鳩に変身した。だがそれは、父アニオスから見れば、

あの恩恵の施し主が救いの手を差し伸べたと云えるのは、不思議な仕方でもとの姿を奪うことが救いの手を差し伸べることと呼べる場合の話で、どのようにして彼女らが自分の姿を失ったのか私には知るすべがありませんでしたし、いまでも語ることはできないのです。

(同二三・六六九—六七二)

というように、いくぶんかの慰めとはなりえても、とても救いとは感じられぬものだった。

4 アイサコス

アニオスの場合と似て、救済が救済とは感じられなかった例を、オウイデイウスはもう一つ残している。河神の娘であるニンフのアレクシロエーは、トロイア王プリアモスと交わり、イーダの山あいで秘かにアイサコスという男児を産んだ。彼は宮殿には近づかず、野山に住んだ。しかし、粗野でもなく、色恋に胸を焦がしもする若者として、これも河神の娘であるニンフのヘスペリエーを何度か追いまわっていた。あるとき彼が彼女を見つけると、ニンフは逃げ出した。

鷹に驚愕した鴨のように逃げる彼女を、トロイアの英雄は追いかける。恐れで足が速まる娘のすぐうしろへ、恋に急かされて足を速める。ところが見よ、草に身を潜めた毒蛇が逃げる娘の足を鉤先のある歯で咬み、毒を体内に残した。命とともに逃げ足も絶えた。アイサコスは息絶えた彼女を狂ったように抱きかかえて叫んだ。「悪かったよ。追いかけたのがいけなかつたんだ。だが、こんなことは思ってもみなかつた。僕はこんな代償をかけて駆け足に勝つつもりじゃなかつた。僕と蛇が両方で君の哀れな死を招いた。傷は蛇のものだが、原因は僕だ。僕の罪のほうが重い。僕も死ん

で、死んだ君を慰めにゆこう」と言うと、波が寄せる音も高く浸食された崖の上から、彼は海へ身を投げた。しかし、落ちてゆく彼を海の女神テーテュスが憐れんで、やさしく受け止め、水面を漂う体を羽根で被った。こうして死のうという願いは果たされずに終わった。恋する者は憤慨した。生きていたくないのに無理やり生かされ、惨めな宿から旅立とうという魂の望みが邪魔されるなんて。すでに新しい翼が肩に生えていたので、彼は飛び上がると、再び海面へと身を投じる。しかし、羽毛が落下を軽やかにする。アイサコスは怒り狂い、海中深くまで頭から突つ込む。死出の旅路を求めて、その試みを何度でも繰り返してやめなかつた。愛が身を細らせたため、いまでも脚のつくりが長く、頸も長く、頭が胴から離れている。いまでも海を愛し、潜ることによる名前もそのままである。

〔変身物語〕一一・七七三—七七五

アイサコスの物語はオウイデイウス以外に典拠がない。恋人を追いかけるうちに、その恋人が毒蛇に咬まれて命を落とすという展開は、オルペウスとエウリュディケーの物語を思い起こさせる。オルペウスの場合は、冥界に降って一度は愛する妻を取り戻しかけたが、一瞬の迷いから、地上に帰るまで振り返るな、という禁を忘れ、もう一度、エウリュディケーを失うこととなった。実は、この話をオウイデイウスは『変身物語』第一〇巻から第一一巻の冒頭にかけて語っている。その結末はしかし、詩人によると、必ずしも悲劇的ではない。というのは、二度も妻を失ったオルペウスは、悲しみのために女性たちを蔑ろにしたため、トラキアの女たちによって八つ裂きにされて殺されるが、死んだことで、言ってみれば、晴れて冥界へ行くことができたので、そこでめでたく妻と再会し、それからは二人で平安に暮らせたからであった。それに対して、アイサコスもヘスペリエーに会うために死んで冥界へ行こうと

するのだが、あいにく女神テーテュスにより「救済」を受けてしまった。まったく、世の中はままならないものと言わなければならぬ。ちなみに、結びに「潜ることによる名前もそのまま」というのは、アイサコスが変身したミズナギドリを意味するラテン語のメルグス (Mergus) は「潜る」という意味のメルゴ (Mergo) に通じていることによる。

ついでながら、ミズナギドリからすぐに想起されるのは、ホメーロス『オデュッセイア』の次の場面である。カリュプソーの島から船出したオデュッセウスは、パイアーケス人の国が見えたところで、海神ポセイドーンの引き起こした嵐によって海の藻屑となろうとしたが、この危機に、

カドモスの娘にしてくるぶし美しきイーノーとして、かつては人間の声を発する身であったが、いまはレウコトエーと呼ばれて塩の海原で神々の誉れにあずかる女神が、オデュッセウスの流浪し、苦難に苛まれるさまを憐れんだ。ミズナギドリのように飛んで水面の上へ出ると、筏の上に座を占め、話しかけた。
 (『オデュッセイア』五・三三三—三三八)

女神は、服を脱ぎ、筏も捨て、パイアーケス人の国まで泳いで行け、と指示を与えてから、

「さあ、このヴェールを胸の下に巻け。神力の宿るものゆえ、苦しむ恐れも死ぬ恐れもない。だが、おまえが両手で陸地に触れたなら、ほどいて葡萄酒色の海へ投げ返せ。陸地から遠くへ、おまえ自身は背を向けて投げることだ」。こう言つて女神はヴェールを与えるや、再び波高き海の中へ身を沈めたが、そのさまはミズナギドリのように、黒い波に包まれた。
 (同五・三四六—三五三)

オデュッセウスは用心深い英雄であるから、波で筏が壊されるまでは自分から泳ぎ出さなかつたが、結

局、女神の指示どおりに泳ぎ始めると、ポセイドーンもその場を去り、アテーネー女神の手助けもあつて、英雄は陸地に辿り着き、そこで、ヴェールをほどいて海に投げた。ここではミズナギドリは正真正銘、救いの神であつた。

〔注〕

- (1) 「知らず」(Ignara) の代わりに「知りつつ」(Satura) とする読みもある。
- (2) この表現にはおそらく、メガラ陥落の際に戦死したことが前提とされている。
- (3) ニーソスが姿を変じた海鷲は晴天を告げるものとしてウエルギリウスは歌っている。
- (4) 同四〇六―四〇九Ⅱ「キーリス」五三八―五四一。